

13 世紀散文 Roman de Tristan における tant seulement

伊 藤 了 子

0. はじめに

tant seulement という表現は現代語では古語としてまれに見られるだけである⁽¹⁾。我々のテキストには **tant** と **seulement** が隣接して共起する **tant seulement** は 236 件あるが、その中には、たとえば **fors tant seulement que** のように〈**fors que**〉に **tant seulement** が挿入されたのか〈**fors tant que**〉に **seulement** が挿入されたのか判別できない例も少なからずある⁽²⁾。しかしそれらを除いても、次の例が示すように **tant seulement** の存在は確実である。**seulement** の前に **tant** が付加されたのが **tant seulement** である。

- (1) **Atant es vous par la forest venir monsieur Yvain tout le grant chemin en la compaignie de deus esquiers tant seulement.** (t.III-X-78-p.124) 「従者 2 人のみを伴って」
- (2) **et ceveauçoit en la compaignie d'un viel chevalier et d'un esquier seulement.** (t.II-XV-148-p.285) 「一人の老騎士と一人の従者のみを伴って」

現代仏語では **tant** は動詞、**si** は形容詞・副詞という組み合わせが決まっているが、古仏語では **tant** *adj./adv.* の例も頻繁に見られる。**tant seulement** はそのひとつといえるが、***molt** (**mout**) **seulement** や ***trop** **seulement** は存在しない。また、**tout seulement** は全 9 巻を通して 3 件のみである。

量詞 **tant** と **seulement** の組み合わせはなぜ可能なのか？ **tant** と **seule-**

ment それぞれの働きからその答えを導くのが本稿の目的である。

はじめに *tant seulement* 以外に、我々のテキストにおいて *tant* がどのような形容詞・副詞とどのような頻度で共起しているかを観察し、その中で *tant seulement* が特異な存在であることを確認したい。

1. *tant* adj./adv.

tant と共起する形容詞・副詞はどのようなものか、何らかの特色があるのか？過去分詞や現在分詞から派生した形容詞が多いだろうという予測はできるが、事実はどうなのか。

我々のテキストでは (3) のように *tant* を繰り返し用いている個所もあれば、(4) では *tant bel* のすぐ近くに *si bel* がある。このことは形容詞・副詞の種類によって *tant* か *si* かが決まるのではないことを示している。

- (3) *et il connoist que ce est mesire Tristrans qu'il a ja tantes fois esprouvé et scet qu'il est tant fors et tant vistes, qu'il est tant preus et tant legiers et tant vaillans de toutes coses, et est de si lonc tans comme il sot ses anemis mortuus ; (t.VII-I-35-p.122)*

- (4) *Kahedins fu en la maison le roi Artu receüs tant bel et si cointement et si bel apelés de tous et de toutes k'il dist bien tout apertement a soi meïsmes que voirement n'a il u monde nule si cointe gent com en la maison le roi Artu. (t.I-V-91-p.157)*

われわれのテキストにおける絶対数は *si* の方が圧倒的に多く、*tant* と隣接共起しているのは次の表が示すものだけである⁽³⁾。

隣接型 tant adj./ adv.

() 内の数字はわれわれのテキストにおける生起数である。(-) は生起数ゼロを表す。

*印：綴り字のヴァリエントに関して注 (4) を参照。

	形容詞		副詞	
	tant～	si～	tant～	si～
a	acaitivant (1) aiesé (1) angousseus (1) anieuse (1) avenant* (2) avillant (1)	(-) (-) (5) (1) (6) (-)	ardanment (1) angousseusement (1)	(-) (4)
b	bel* (17) boin* (3)	(99) (112)	bel (5) bien (2)	(22) (256)
c	coureciés* (28)	(23)		
d	deboinaires (1) desirans (3) destrois (1) dolans* (60) doutant (1) durs (1)	(3) (11) (2) (25) (-) (32)	durement (71)	(518)
e	envoisié (1) esbahis (7) espesse (1) estrange (1)	(1) (17) (-) (11)	ententivement (1)	(2)
f	febles (1) felons (1) fors (3)	(4) (-) (34)	felenesement (1) fort (3)	(27) (96)
g	grant* (2) grevés (2) greveuse (1)	(1265) (2) (1)		
h	hardis (7)	(34)	hounereement (2)	(4)
i	iriés* (21)	(6)		
j	joians* (2)	(13)		
l	las (1) legiers (1) liés* (11)	(3) (5) (26)	longement (2)	(35)
m	merveilleus (1)	(32)	mar (1) merveilleusement (1) morteument (1)	(-) (41) (4)
n	nices (1)	(-)	noblement (2)	(9)
o	orgueilleus (1) obsure (2)	(-) (4)		
p	pensieue (1) preus (3)	(-) (27)		(-)
r	riches (1)	(2)	ricement* (3)	(25)

s	sages (1)	(14)	seulement (236)	(1)
t	traveilliés* (11)	(27)		
v	vaillans (1) vistes (1)	(12) (5)	volentiers (1) * voirement (25) (5)	(12) (-)

このように隣接型で **tant** と共起する形容詞・副詞の種類はそれほど多くない。中には 1 回しか用いられないものも多い。これらの形容詞・副詞は **tant** としか共起しないというわけではなく、むしろより積極的に **si** とも共起している。たとえば **tant grant**(2) に対し **si grant**(1056), そして **tant durement** (71) のように頻度が高く思われるものでも **si** との共起の方が多い (**si durement** (518))。ちなみに **tant** の方が多いのは **dolant** [**tant** (60) ; **si** (25)], **courecié** [**tant** (28) ; **si** (23)], **irié** [**tant** (21) ; **si** (6)] と **seulement** [**tant** (236) ; **si** (1)] だけである。上の表は **tant** と隣接型共起をしている形容詞・副詞だけを列挙したもので、**si** としか共起していない形容詞・副詞はわれわれの作品全体にわたり無数にある。

このようにわれわれのテキストの傾向としては、形容詞・副詞は **tant** よりも **si** との共起の方が、種類も数も圧倒的に多い。その中で特異といえる存在が **tant seulement** なのである。

2 章で **tant** について、3 章で **seulement** と **tant seulement** について考察する。

2. tant とは

まず、**tant** はどういう働きをするのかを、**tant** が動詞と関わる場合と形容詞・副詞 **adj./adv.** に分けて例の観察と考察を行いたい。

2. 1. tant V のばあい

動詞が表す事行 **V** と **tant** の関わり方に関してこれまでの筆者の考察をまとめる (伊藤 2003, 2004, 2007)。事行のタイプが重要なので **aler**, **dire**, **amer**

という 3 つの異なる事行タイプの動詞を選ぶ。

2. 1. 1. *aler* と *tant*

tant と共起するときの *aler* は、状態変化を伴う移動動詞ではなく、移動の行為を表す。そして *tant* は「或る距離（あるいは時間）量」を表し、(5) では、完全に一致するわけではないが日本語の「どンドン」のような漸次進行のニュアンスと終点 *P* が表される。(6) の *tant* と *que* は隣接しているので接続詞的な解釈（「*P subj* まで」, 「その結果 *P ind.*」）も可能である。

- (5) **Tant ont alé** en tel maniere k'il sont venu dusc'a la fontaine u li cevaliers demouroit encore (t.II-XV-163-p.306) 「彼らはこんな風に *tant* (或る距離) 進んだ」つまり *P* : 「彼らは泉までやってきた」。その時（あるいはその地点）が終点である。

aler には隣接型 *tant que* の例が見つからないが、*cevauchier* は *aler à cheval* と同義なので次に援用する。

- (6) **Lors cevaucha tant** qu'il vint a la cort le roi Artu u il ne trouva mie mout de gent, (t.VI-VII-54-p.160) 「彼は馬を進めた、その結果 *P* : アーサ王の宮廷に着いた」

上の 2 例は進んだ結果或る地点に到達したことを表し、進んだ距離や時間が多いというニュアンスは伝わらない。一方 (7) では「多く」進んだという解釈が *P* によって可能である。

- (7) **Tantost** com il furent assis, conmencha la nef a aler par la mer grant oirre, car li vens fu fors qui se feri el voile, et **ala tant en poi d'eure** qu'il ne virent tere prés ne loing. (t.VIII-XI-180-p.262) 「そして短時間で *tant* 進んだ、その結果 *P* : 近くにも遠くにも陸は彼らには見えなかった」

「多い」か否かは事態 *P* によって決まる。*tant* が表すのではないといえる。

2. 1. 2. *dire* と *tant*

- (8) (...) Il i mora, u g'i morrai, u ambedoi par aventure.»

Et **tant dist** Palamidés, et **plus ne dist a cele fois**. (t.VII-III-71-

p.170)「パラミデスはそう（そこまで）言い、そのときはそれ以上は言わなかった」

(9) の伝達内容は、短い 1 文のみで、その内容も過激なものではない。

- (9) Et il respont adont : «Je ne voel pas laissier le Marés.» **Itant** dist il adonc, **et non plus mais**. (t.I-XIV-180-263)「そして彼は答えた：『私は le Marés を残したくない』。そう（そこまで）彼は言った、そしてそれ以上は（言わ）なかった」

(i)tant も plus も伝達内容の量を表している。後続文の plus ne や non plus mais「それ以上は...ない」が裏づけるように、この tant「そこまで」は「多い」というニュアンスは含まない。しかしたとえば日本語ではあるが「そこまで言うか！」なら文全体で多い（言い過ぎ、過度）というニュアンスが現れる。逆に(10)のように seulement と共起するときは少ないことが伝わる。

- (10) —Dame, ce dist la damoisele, son non ne vous dirai je mie a ceste fois, car par aventure il ne li plaist mie. Mais **tant** vous **di** je bien **tout seulement** que c'est li mieudres cevaliers du monde. (t.I-I-34-p.98)「奥方様、今は彼の名を言いません、というのは多分それは彼の気に召さないから。でもこれだけはあなたに言いましょう、つまりこれは世界中で最も優れた騎士であるとだけ」

tant が seulement と共起できることは、tant 自身が「多量」を表すのではないことを示している。

2. 1. 3. amer と tant

amer と tant が共起するとき、P は事行 amer の程度（量）が高いことを表すような事態であることがほとんどである。

- (11) Li rois Marc **amoit tant** la roïne Yseut **qu'il** ne le pooit oublier, (t.IX-I-1-p.69)「マルク王は王妃イズーをそれほど・そこまで愛していた」そ=que P「彼は彼女を忘れることができなかった」

- (12) I l'**amoit tant** k'il n'avoit nul parent carnel k'il amast de gregneur amour (t.IV-IX-135-p.221) P：「より大きい愛で彼が愛するような

肉親はいなかった」

以上から、次のように *tant* を記述することができる。

2. 1. 4. *tant* V の *tant*

tant は量詞であって「物量」・「時間量」・「空間量」・「質量>程度」等を表す。しかし *tant* は、量の多・少ではなく、「或る量」をあらわす。つまり量化という働きをする。量化というのは、デフォルト状態で無限（＝連続）のものを有限（＝不連続）にするということである。線のイメージにすると始まりと終わりのある（つまり方向性のある）線分によって表される。しかし終点は始点の存在が前提なので、始点は必ずしも明らかにする必要はなく、過程（経過）と終点に焦点がある「...まで（の量）」ということになる。終点は先行文脈（ $P_1, P_2, \dots P_n$ ）あるいは後続文脈（*que P*）が表す。*P* がどこにも具体化されていない場合（まれ）は、周知の事柄であることもある。

tant が前方照応のばあい、「そこまで（の量）」というような意味になる。*tant* が後方照応（*que P*）のばあい、*tant* と *que P* が離れていれば（*tant* ... *que P*），*tant* が表す「そこまで（の量）」の「そこ」は *que P* によって具体化される。*tant* と *que P* が隣接している（*tant que P*）ときも同様であるが、「そこ」=*que P* なので *tant que P* は「*P* まで」の意を表す。なお *P* の動詞が直説法のととき、*P* は「結果」として現働化される。

以上から、次の仮説を立てることができる。

- (13) 仮説：*tant* が事行に関係するとき *tant* は「そこまで（の量）」を表し、*tant* 自体は「多量」の概念を含まない。しかし文全体で「多量」のニュアンスが生じることがあって、それを可能にするのは事態 *P* である⁽⁶⁾。また、少量のニュアンスは *seulement* の使用によって明示される。

では *tant* が形容詞・副詞に関係するときの *tant* はどのような働きをしているのか、上の仮説で説明できるのかどうかを次節で考察する。

2. 2. *tant* adj./adv. のばあい

結論から言うと、(13) の仮説に反することなく、*tant* は「そこまで（の量・程度）」を表し、「そこ」は多くのばあい後続の *que* P が具体化する。(14) では自分の兄弟が打ち負かされて地面に横たわるのを見た *Hestor* は *tant* 「そこまで」怒り悲しむ、つまり P まで。

- (14) *Hestor, ki voit son frere a tere, est tant iriés c'a poi qu'il n'esrage de doeil* ; (t.V-IX-207-p.290) P : 「彼はもう少しで悲しみに激怒するところだった」

(14) に見られるように P は形容詞・副詞の表す概念の程度が高いことを表す事態であることが多い。たとえば *k'il vauroit orendroit estre mors* 「彼はすぐにも死んでしまいたい」、*com nule plus* 「最高に」、*k'il en laisse le boire et le mangier* 「彼は飲食を放棄する」等々。しかし (14)～(19) にも見られるように P は定式化してしまっている印象もぬぐえない。そのせいか *durement*, *de grant maniere*, *oultreement*, *merveilleusement* 等、「高い程度」を示す標が挿入されることが多い。

- (15) *Il est tant durement iriés c'a poi k'il n'esrage de doeil*. (t.II-VI-43-p.134 ; T.III-XIV-131-p.172 ; t.V-IV-41-p.111) P : 「もう少しで悲しみに激怒するところだった」

- (16) *Il en est tant iriés durement k'il ne set k'il doie dire*. (t.II-XVIII-192-p.345 ; t.IV-XI-157-p.246) P : 「彼は何を言えばよいのかわからない」

- (17) *dist il tant iriés si durement que a poi que li cuers ne li crieve*, (t.VI-I-10-p.70) P : 「彼の心は張り裂けそうだ」

- (18) *Ele s'apuie sour une fenestre, tant irie de grant maniere qu'ele ne set qu'ele doie dire*. (t.II-V-34-p.118) P : 「彼女は何を言えばよいのかわからない」

- (19) *Li rois March par est tant courechiés oultreement quant il regarde k'il en mainne o lui monsieur Tristran c'a poi k'il n'esrage*

de doeil. (t.IV–IX–138–p.224) P:「もう少しで悲しみで激怒するところだった」

- (20) Ce li samble que la nuis estoit **tant obscure merveilleusement que a painnes pooit il veoir le cemin par u il aloit.** (t.I–V–97–p.163) P:「自分が通っている道がほとんど見えなかった」

しかし高い程度を表す標が付加される必要性は、P の定式化だけではなく、本来 **tant** は「多・高い程度」を表さないことによって説明できる。つまりこれは (13) の仮説を裏づける現象の一つであると考えられる。したがって形容詞・副詞に関係する **tant** も動詞に関係する **tant** と同じ働きをするといえる。ただし、**seulement** をのぞいて。

seulement は品詞としては副詞に分類されるが、**tant seulement** の **tant** は上でみた形容詞・副詞に関係する **tant** の働きと同じではない。この **tant** は先行文脈の中にも後続文脈にも照応できる P をもたないのである。

さらに違いを挙げると、事行の展開の様態を表す副詞で **felenesement**, **hounereement** といった副詞の振る舞いに準ずる **durement** (*fortement, beaucoup, très* の意 (Godefroy)) は、**tant**～(71), **si**～(518) 以外にも **mout**～(342), **trop**～(200), 比較の **plus**～(7), **mout tres**～(1), **si tres**～(2) 等の副詞との共起が見られる一方、**tout durement** は生起数ゼロであるのに対し、**seulement** と共起する副詞は **tant** 以外には **tout** (3) のみである⁽⁷⁾。

seulement はこのように振る舞いが他の副詞とは異なる。次章ではまず **seulement** の使用例と働きを観察した後、**tant** との関係を考察する。

3. tant seulement

まず **seulement** がどのような働きをしているのかを見る。

3. 1. seulement の用法

われわれのテキストの **seulement** の主な働きは辞書の記述どおりである。

- (21) 1) sans qqu'un ou qqchese de plus (*Godefroy*), 2) Sans rien d'autre ; en excluant ce qui n'est pas mentionné, en restreignant à . . . (pas davantage, pas plus, rien de plus, en tout et pour tout, etc.) (*Grand Robert*)

seulement は主語, 属詞, 動詞, 直接目的語, その他の補語など様々な文要素にかかることができる (例 22~25, 28)。また, 事態全体にかかるものもある (例 32)。seulement の位置は, 関係する要素の前・後, 少し離れたところなどかなり自由である。

- (22) **Diex seulement et Aventure le puet bien faire** (t, V-IX-209-p.292) 主語「神のみがそれを行うことができる」(>「神以外は不可能」を言外に含む)

- (23) **Li rois Artus rainne orendroit tant seulement en cest monde, il n'i a prince ki maintiengne orendroit hounour fors lui tout seul.** (t.IV-XIII-172-p.263) 主語「アーサー王のみが目下この世で君臨している。彼ただ一人を除いて名誉を維持している君主はいない」

(23) の第 2 の文 il n'i a . . . は第 1 文の言い換えで, tant seulement は離れている主語 li rois Artus にかかることが明らかである。

- (24) **car nous estions .II. cevaliers tant seulement, et vous estiés troi.** (t.VIII-X-179-p.259) 属詞「われわれは 2 人のみで, 汝らは 3 人だった」(>「他にはいなかった」)

- (25) **Il en a le cors seulement, et que vaut li cors d'une dame morte?** (t.IX-VI-50-p.147) 直接目的語「彼は(彼女の)身体のみを所有している。死んだ奥方の身体が何になる?」(>他(体以外)は所有していない)

文脈によっては「最少限~だけでも」, 「~さえ」のニュアンスが生じることがある。これは, 言及されたもの以外を排除する「単なる~」, 「~のみ」の意とは真逆の「極端な事柄を事例として提示し, 他の一般を推し量らせる」, あるいは「そればかりではなく, さらに付け加わる意を表す」(大辞林) という

働きである。

- (26) **Ce seulement** que je le voi devant moi m'anuie. (t.III-XV-136-p.177) 主語「単に汝が目前にいること」>「いるだけでも」という意味であって、「他（見る以外）は嫌ではない」ということではない。

- (27) **Seulement li nons de monsieur Tristran** l'a mis en erreur et en doute, (t.VII-IX-232-p.375) 「単にトリスタンの名前が、彼を苦悩と恐怖の中に置いた>トリスタンの名前を聞いただけで彼は苦悩し恐れた」他（名前以外）は大丈夫ということを言いたいのではない。

上記 2 例は肯定文であるが、この意味は否定の文脈で現れやすい。

- (28) — Dame, mout fis que fole quant je mis mon cuer en amer si haut home comme est mesure Lancelos, que il ne me daingne **seulement regarder!** (t.VI-VI-49-p.151) 「私を見ることだけでも（さえ）（彼はあえてしない）」

- (29) ki en tel maniere me requerés de ce dont je **seulement** ne quier oïr parler! Pour Dieu, parloir d'autre chose s'il vous plaist, car chis parlemens m'anuie trop! (t.V-V-57-p.132) 「私が話されるのを耳にすることだけでも（さえ）望まない事について（汝は私に問う）」

「さえ」は条件文でも見られる。条件は接続詞 *se* や *ki* (*qui* = *si l'on*), *pour tant que*⁽⁸⁾によって導かれる。

- (30) Adont fust çaiens parfaite toute chevalerie et toute biauté **se** cil doi **seulement** i fuissent; mais quant cil doi i falent, il m'est avis que tout i falent. (t.VI-XVII-91-p.240) 「あの二人がいさえしたら、あの二人さえいたら」

- (31) — (...) Lamorat nous est ocoisons de tout le doel que nous avom. **Ki seulement** le cors de Lamorat eüst mis a doel et a honteuse mort, nous fuissom hors de toutes douleurs. (t.IV-XII-159-p.248)

「全ての悲しみは Lamorat に由来する。もし誰かが Lamorat その人を苦しめ死に至らしめさえしたら、我々はあらゆる苦悩から解放されるだろうに」

- (32) (. . .), s'il avoient orendroit feru en cest pais sour l'escu d'aucun preudome, u fust d'espee u fust de lance, pour tant que li caus tant seulement i parust, il ne le porteroit puis a son col en nule maniere du monde, ains atendroit k'il en eüst un autre. (t.II-IV-18-p.90) 「(軽蔑されているコーンウォールの騎士の) 打撃の跡形がそこ (盾) に残るだけで、(この国の) 騎士はその盾を使わない (捨てる)」

tant seulement は P 〈li caus i parust〉全体にかかっている。

さらに seulement には seul と競合する働きもある。

- (33-a) **Nous doi seul**, nous en devom plaindre, et *toutes autres gens* s'en doivent loer, (. . .) **Nous doi seul**, nous en devom blamer, la u *tout li autre* s'en loent. (t.II-XV-164-p.308) 「われわれ二人のみがそのことを嘆き、他のすべての人々はそれを称える。(. . .) われわれ 2 人だけがそれを咎める、他の人々すべてがそれを称えるときに」

この seul が他を排除する働きをしていることは、**nous doi** (主語) 対 *toutes autres gens* (主語) ; **nous doi** (主語) 対 *tout li autre* (主語) という対立項の存在によって明らかである。tant seulement にもまったく同じ構文が見られる。対立項 : **nous doi** (主語) 対 *tout li mieudre chevalier* (主語)

- (33-b) Et ja l'avom quis longement et encore le querom nous. Et **nous doi tant seulement** ne le querom mie, **anchois** le quierent avoec nous *tout li mieudre chevalier* de la maison le roi Artu et de la Table Reonde. (t.III-XVI-142-p.180) 「われわれは長い間彼をさがしたそしてなお探している。われわれ 2 人だけが彼を探しているのではない、むしろわれわれと共にアーサー王の館と円

卓の中の最良の騎士全員が彼を探している」

一方、対立項は存在するが文の要素が同じでないことによって、「他を排除する」働きではないように見える例もある。つまり主語「彼」と主語「彼以外の全員」の対立ではなく、主語「彼」と目的語「全員」の対立により、「彼ひとりが」対「(他の) 全員を」の意になる。

- (34-a, b) Or esgardés que vaut uns hom : **il seus** les tient tous em bonté et ce k'il font il le font par essample de lui. **Il tant seulement** nous fera hui vergoigne. Ensi vait des aventures! Ceste journee vint pour lui et non pour autre! (t.V-IX-204-p.287) 「彼一人が彼ら全員を高めている。(...) 彼はたった一人でわれわれに恥をかかせるであろう」

この例では品詞の違いが意味にも表出している、つまり形容詞 *seul* は主語の同格として、副詞 *seulement* は動詞の様態として。次例もまったく同様である。

- (35-a) car **cele seule** enlumina **toutes les dames** qui furent au tournoi. (t.VI-XVII-91-p.239)

- (35-b) Cil est sires de tous les Saisnes. **Cil seulement** les amena tous en cest païs, (t.IV-XIV-199-p.294)

以上、*seulement* は文要素（主語、動詞、直接目的語等）やその一部分あるいは事態全体に関係し、基本的には言及されたもの（こと）以外を排除し、限定する働きをしていることが確認できる。そこから、文脈によっては「～さえ」、「～だけでも」のような条件のニュアンスを生じさせる。*seulement* には「ひとりで」の意もあるが、「ひとりで」ということは「他を伴わず」という意味でもあるので、結局は言及されたもの以外を排除する働きに変わりはない。

3. 2. *tant seulement*

次の2例では *seulement* は (i)*tant* を限定している。

(36) —Et queles aventures i aviennent? fait Kex. **Itant** me dites **seulement**, si le conterai puis par aventure en la maison le roi Artu.»

(t.III–XI–95–p.140) 「そこでどんな事が起こるのですか？ それだけ教えて、そうすれば私はアーサー王の館でそれを話すから」

この **itant** は前方照応。

(37) Mais **tant** me dites **seulement** : volés vous desfendre ceste damoisele de ce dont ele est apelee? (t.VII–III–74–p.173) 「これだけ教えて、つまりあなたはこの乙女を（彼女が呼ばれたことから）守りたいのですか？」この **tant** は後方照応である。

itant は **tant** と等価である。**itant** も **tant** もここでは **dire** の目的補語で、それに **seulement** がかかっている（>「それだけ」）。

同様に、**tout seulement** が **tant** にかかっているものもある。

(38) —Dame, ce dist la damoisele, son non ne vous dirai je mie a ceste fois, car par aventure il ne li plaist mie. Mais **tant** vous di je bien **tout seulement que** c'est li mieudres cevaliers du monde. (t.I–I–34–p.98) 「彼の名を今はあなたに言わないでおきましょう。おそらく彼の気に副わないから。しかしこのことだけはあなたに言いましょう、つまり彼がこの世で最高の騎士であるとだけ」この **tant** は後方照応で、**tant** の内容は後続の **que P** が表す。

(39) では **tant seulement** が一体となって **dire** の目的語 **son non** にかかっている。

(39) **Son non** me dites **tant seulement**, (t.III–XXVIII–246–p.273) 「名前だけ教えて」

tant seulement と **tout seulement** はどう違うのか？ **tout seulement** はごく少数しか例がないが **tant seulement** と比較してみよう。

(40) «Sire, (. . .), oïl, il sont tout venu, fors un **tout seulement** : (t.VI–XVII–102–p.255) 「彼らは全員来た、ただ一人を除いて」 **tout seulement** は **un** にかかる。

- (41) —Ja n'en soie je merchiés, fait Brehus, ne je ne requier merci avoir fors felonnie **tout seulement!**» (t.IX–VII–68–p.175) 「また私は慈悲を得ることを求めない、ただ felonnie を除いて>私が得たいのはただ felonnie のみである」 tout seulement は felonnie にかかる。
- (42) Je ne demant de vous fors une joust **tant seulement.**» (t.V–IV–38–p.109) 「私は汝に要求しない、ただ une joust 一騎打ち 1 回を除いて」 tant seulement は une joust にかかる。

上例の tout seulement と tant seulement は、どちらも先行名詞群に働きかけ、それ以外を排除するという意味で同じ働きをしている。

tout seulement と tant seulement が同じような働きをしているということは明らかになったが、本来 tout と tant の働きは異なる。tout は seulement の働きが 100% (=「完全」)であることをあらわす。つまり tout は seulement に働きかけて seulement の働きを強調するということができる。一方、tant がここでも (13) の仮説の働きであるなら、『「そこまで」のみ』となり、tant 「そこまで」の「そこ」は関係する文要素を指し、それに seulement がついていくことになる。ところが「関係する要素」といっても <tant seulement . . . que P> という構文は存在しないので、tant seulement の tant は後方照応ではない。では前方照応かというところでもない。

問題をわかりやすくするために fors GN のケースを見よう。

- (43) Nous ne volom fors *la bataille*. (t.I–II–71–p.138)

fors GN

- (44–a) fors *Palamidés* **seulement** (t.VI–I–9–p.68)

fors GN seulement

- (44–b) fors **seulement** *la roïne Yseut*. (t.I–V–91–p.157)

fors seulement GN

- (45–a) fors *Brangien* **tant seulement** (t.I–X–153–p.229)

fors GN tant seulement

- (45–b) fors **tant seulement** *une damoisele*, (t.IV–XIII–180–p.271)

fors tant seulement GN

(42) や (45-a) だけを見れば *tant seulement* の *tant* は前方照応で「そこまで」の「そこ」は GN を指す（「そこ (GN) までのみ」）という解釈が可能であるようにみえるが、(45-b) が示すように *tant seulement* は GN に先行することが可能なので、その場合 *tant* だけが GN (*une damoisele*) を指すとは考えにくい。*seulement* を伴わない *GN *tant* は存在しない (**fors GN tant*, **fors tant GN*) ので *tant seulement* はそれ自体で閉じた表現であると考えるべきであろう。

そうすると、この *tant* は何か？ 量詞 *tant* の基本的役割は 2. 1. 4 で述べたように、量化すなわち「連続している概念」を「不連続」にすることである。*tant* は関係する事行、形容詞・副詞の概念を量化（不連続に）する、つまり切り取り（終点を与え）、限定するという働きをする。これが、*seulement* の「言及されたもの以外を排除し、限定する」という働きと共鳴する。一方が他方に働きかけて強調という効果を生む *tout seulement* に対し、*tant seulement* は、根底のところ類似の働きをする 2 つの要素を並べることで強調の効果を生むしくみであるといえる。*mout tres* (+adj.) など、*tres* がまだ市民権を獲得していないからでもあろうが、その一つと考えられる。

4. まとめ

古仏語における *tant* は、現代語より制約が少なく自由でそれゆえにさまざまな表現効果を生み出すことができる不思議な語である。*tant seulement* はまれであっても現代まで使用され続けた表現である。しかしなぜ *tant* と *seulement* という組み合わせなのか？ この疑問に導かれて本稿で考察を行った結果、一応それぞれの本質的な働きが同じで、二つの類似機能の語を組み合わせることで強調効果を生じせしめるという結論に達した。

注

- (1) [古] **tant seulement** 「ただ単に」『ロワイアル中』
frantext の検索結果は、1900–2000, genre indifférente の 1718 textes のうち **tant seulement** のヒット数は 8 件。2000 年以降は 1 件のみ：Roubaud Jacques (2006)。
- (2) (a) Des autres ne vous sai je que dire **fors qu'il** sont sain et haitié.
(b) Il ne me dist plus (…), **fors tant qu'il** me demanda quel part (…)
(c) **fors tant seulement que** c'est un hom forsenés,
- (3) 本稿で隣接型と呼ぶものの他に、分離型と呼ぶものがある。それは **tant** と形容詞・副詞との間に動詞 **estre** が介入しているものである。このばあい **tant** は動詞ではなく形容詞・副詞に関係する。
(a) «Ha! Sire Dieus, fait mesire Tristrans, *tant par* est ceste beste estrange **et tant est merveilleuse** a veoir! *Trop est estrange* sa façon! —Certes, voirs est, fait Breüs. Estrange est ele voirement!»
この構文 **tant est** と同じ意味での **si est** はほとんどない。si が自立した **ainsi** の意味であったり、接続詞であることが多い。
(b) Ki est cis cevaliers ki ci vous encauce que vous dites ki **si est** mauvais et desloiaus?
(c) Tele amour **si est** trop amere ;
(d) S'il n'est escaufés du soleil, **si est** il escaufés d'autre cose. 接続詞 **se** の係り
(e) **Quand** li esquiers oïst ceste parole, **si est** si dolans comme nus plus. **quand** の係り
- (4) avenant, avenans // bel, bele, biaux, biau // boin, boins, boines // courechiés, courechié(s), courechie // dolans, dolant(e), dolente/(grans, granz), grant// iriés, irie, iree // joians, joiant // liés, lié // traveilliés, traveillié // ricement, richement.
- (5) **tant voirement** (25)
結論から言うと、**tant voirement** の **tant** は **voirement** にかかるのではない。
voirement はほとんどが **fors tant que P** (20 occ.) と **fors que tant que** (1 occ.) に挿入されて **fors tant voirement que**, **fors que tant voirement que** になったと考えられる。さらに 1 例は **de tant fumes nous deceü** の **de tant** (= *d'autant*) と動詞 **fumes** の間に **voirement** が挿入されたもので、残りの 3 例も **voirement** を除いてもそのまま文が成り立つ (逆に **tant voirement** を除くと成り立たなくなる) ので **tant** が **voirement** にかかるのではなく、**voirement** が **tant** の右隣に挿入されたものと考えられることができる。(a) は、(a') が示すように <tant

i avoir que P》「(1) 非常に...なので...だ, (2) 理由はともあれ, とにかく」という表現(注: 現代語でも古風な文学的表現, あるいは話し言葉で用いられる(『小学館仏和』, 『ロワイアル中』))のヴァリエントで, そこに *tant* は不可欠である。

- (a) se **tant voirement** n'i eüst k'il fust compains de la Table Reonde
(a'), mais **tant i a k'il** n'entrent pas dedens.

si voirement の si も voirement にかかるものではない。下の (b), (c) の voirement は (d) に挿入されたものである。issi, si は *ainsi* の意である。

- (b) issi voirement m'aît Diex (16)/Dieus (5)/Deus (1) 計 32
(c) si voirement m'aît Diex (27)/Dieus (4) 計 31
(d) si m'aît Diex (278)/Dieus (37) 計 315

- (6) 現代仏語に関しては藤田 (1996) が詳しい。
(7) *si seulement* で検索すると 1 件ヒットするが, この *si* は *com je vausisse* と呼応していて, *seulement* にかかるのではないと解釈できる。—Chertes, fait Lanceselos, il me fust bien **se** je le peüse **si seulement** veoir **com** je vausisse. 「私に彼に会いさえできれば」
(8) ***pour tant que***, (...) passées du sens de «quant à ce que» au sens de «sous la réserve que, à condition que, pourvu que, pour peu que». [Ménard, p.234] より

参考文献

- Roman de Tristan en prose*, 1987 版 *Corpus de la Littérature Médiévale, En langue d'oïl des origines à la fin du XVe siècle, Prose narrative—Poésie—Théâtre*, Champion Electronique 2001
藤田知子 (1996): 「*tant* における程度・結果・比較」, 『フランス語学研究』第 30 号, pp.1–13.
小熊和郎 (1997): 「高い程度の表現について」『フランス語を考える, フランス語学の諸問題 II』東京外国語大学グループ《セメイオン》三修社.
伊藤子 (2003): 「古仏語の *tant—tant aler* から出発して—」『人文論究』第 53 巻第 3 号, pp.102–118, 関西学院大学文学部人文学会.
伊藤子 (2004): 「古仏語 *tant dire* の *tant—13 世紀散文『トリスタン物語』の例から—*」『人文論究』第 54 巻第 3 号, pp.87–103, 関西学院大学文学部人文学会.
伊藤子 (2007): 「*Le Roman de Tristan en prose* における *amer* と *tant*」『人文論究』第 57 巻第 3 号, pp.82–99, 関西学院大学文学部人文学会.
伊藤子 (2010): 「前置詞の後の *tant* と *ce—*『散文トリスタン物語』のばあい—」

- 『人文論究』第 60 巻第 3 号, pp.51-74, 関西学院大学文学部人文学会.
- Culioli, A. (1992) : “Un *si* gentil jeune homme! et autres énoncés” *L’information grammaticale*, no.55, pp.3-7.
- Francel, J.-J. (1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels en français*, Droz.
- Le Goffic P. (1991), Comme, adverbe connecteur intégratif : éléments pour une description. *L’adverbe dans tous ses états*, travaux linguistiques du CERLICO
- Thierry Ponchon (1998), Les emplois de *com* (*e*) en français médiéval, *Du percevoir au dire*, L’Harmattan, Paris.
- Gaffiot F. : *Dictionnaire illustré Latin Français*, Hachette, Paris, 1969
- Godefroy F. : *Dictionnaire de l’Ancienne Langue Française du IXe au XVe siècle*, Champion Electronique 2002
- Hasenohr, G. (1993) : *Introduction à l’Ancien Français de Guy de Lage*, Sedes.
- Moignet G. (1973) : *Grammaire de l’ancien français*, éditions Klincksieck.
- Ménard F. (1988) : *Syntaxe de l’ancien français*, éditions Bière.
- Picoche J. & Marchello-Nizia Chr. (1994) : *Histoire de la Langue Française*, Nathan.